

して銀行界の不安を感ぜし際、政府が大蔵省證券の償還を行ひしが如きは其例にして、米國に在りては金融逼迫の際には常に國庫金を支出して之れを救済するを例とせり

資本論終

附錄經濟論集

經濟學の變遷

經濟學は當初實驗を基礎として組立てられたりしものなるも、一科の學術と稱せられてよりは漸次に宙象的推論を交ゆることとなり、又其攻究の範圍も初めは物質的方面にのみ限られしが、之れ亦漸次精神的方面に伸張せられて曾て富を物質的に解釋して夫れ以上に及ばざりしもの、次第に無形の富なるものを認むるに至り經濟行爲の動機等に就ても、縱横に討究する風を爲せり、又經濟學發達の初期に於いては、獨斷的演繹的論法頗る多かりしもの漸く歸納的論法歴史的考察を主とするに至り、獨斷的の弊風を免るゝこととなりぬ、凡そ是れ等の事實は經濟學變遷の主なる潮流たり、抑も經濟學なるものゝ初めて成立せしや、概ね實際家の實驗を基礎として、之に科學的考察を

加味せしに過ぎざりしに、其後經濟學者なるものが實驗家と分離して存在すること、なりたれば是等の變遷を來たせしは、洵に當然の結果なりと謂ふべき也

正統派經濟學者が經濟行爲の動機を以つて利得の念なりと斷定せるは、其要點を指示して謬らずと雖、利得の觀念以外にも多少經濟行爲の動機が、存在することも亦承認せざる可からず、商會の競争が往々感情の乖離に起因し、同盟罷工が主義見解の相違より激烈を加ふるが如き、又は國際間の取引が外交上の感想に影響せらるゝが如き實其例にして、例へば佛人の露國公債に應募するは、一は利得の觀念に基くも、多少同盟國に對する、義務的精神を含める也、又戰時公債應募の場合に於ける敵愾心の發露の如き著しき事例とす可し

自由貿易の理論の頗る明白なるに拘はらず、遂に列國に實施せられざる第一の原因は、それが列國に不利なりと云ふに在らずして、一國が他國を壓倒して經濟上優勝の地位に

立たんとする野心の熾盛なるに在り、自由貿易の論據は各國其長ずる所を以つて、交換を行ふべしと云ふに在りて、之れを實行する結果は、農業國は永く農業國たり、工業國は依然工業國たるべし、之れ十九世紀に於いて第一等の好位地に立ちし、英國民にとりては、頗る歡迎すべき事柄なりしならんも、漸く物興の機運を示しつゝありし他の新勃興國に在りては、決して擇ぶべき政策に非らず、之れを以て今日英國を凌駕せんとしつゝある獨逸は、先づ熱心なる反抗を試み、他の新興國合衆國も亦同様の傾向を示しぬ、正統派經濟學者の主張が往々事實と相容れざるは、只單に商行爲の實驗を基礎として推論し、夫れ以上の攻究の足らざりしに由ること多し

要するに經濟學が一の學科として成立せる以上、其攻究は可及的廣汎の範圍に亘りて、多く遺漏なきを期すべき也、社會學の泰斗コントが、社會を題目とせる總ての學科は相互に關聯して論究すべく、決して分離して成立すべしにあらざると説けるは、經濟學

にも適用せらるべく、殊に現社會を形成するに至れる歴史的經過に就ては、社會各部に亘りて十分の智識あるを要す

四

英國派と獨乙派

若しアダムスミス以前を經濟學發達の第一期とすれば、今や正に其第三期を經過しつゝありと稱すべし、第二期はアダムスミスよりリカード、ミル等に至りて完成せる英國經濟學派即ちオリソドックススクールの時代にして、第三期はロツシエルを先導として今に至れる、獨逸學派即ちヒストリカルスクールの時代なり、而して吾人の見る所を以てすれば、此派も亦早晚社會學派若くは純理派とも稱せらるべき新興派の爲めに其光榮を失ふことあるべきか

乍併實際上の適用に就いて云はゞ現時は尙ほ英國派と獨逸派との紛争時代と云ふべく

前者は主として保守的態度を探り漸く勢力を失ひつゝありて、常に各國の新進學者が後者に與するのみならず、英國に於いても亦同様の現象を示し、ジエボンの如きは既に舊派の缺點を指摘する所ありき、近時或る英文雜誌に英國派經濟學の缺點を擧げて曰く、(一)感情が經濟行爲に何等の關係なしと云ふは實際と合はず、(二)總て此派の人が固信する、利得の觀念は人類慾望の最強なるものゝ一にして、常に總ての行動に伴ふと云ふは利得の念を過重に見たる斷定なり、(三)自由競争自由契約の説も、實際に行はるゝ事尠く早く既に反動を惹起せり、(四)此派の人々は人類の性向に關する攻究足らず、自家の見地を以て他を律せんとせり、(五)人を見ること輕きに失し、それが經濟問題の中心たるを忘却せり、(六)自己と同時代の英國のみを觀察して立論し他國も之に準すべきものと速断し、英國の社會が特殊の状態に在るものたるを悟らざりき云々と、中に就いて終り二項は英國派の最大缺典を捉へたりと云ふべし、人以外に價

格を生ぜしむべきものなしとはマルクスの立論の根據なるが、此説の正否は別問題として、近來漸く此種の推論に意を用ふるに至りしは、經濟學進歩の歴史上、著しき事實と稱すべく、又經濟關係が社會の状態によりて著しき差異あるは、云ふまでもなき事にて、英國經濟學者の之れを輕視せしは演繹的獨斷的に傾く學者の通弊と云ふべし、マーシャル曰く『中世紀の貿易者に始まり、十八世紀の後半リカード一派、英佛の經濟學者の手を経て、所謂自由競争説なるもの發達せりき、余は想ふ之れを其主張せられたる時處に在りて云へば、自由競争主義の如きは、殆んど間然す可からざるもの也、されど其時と處とは、餘りに短かく且つ狭かりき、地價穀代等の問題に對しては自由競争説は最も恰當の學説たるを失はず、而して是等代價穀代等の問題は、盛んに當時の英國に於いて論議せられたるもの、自由主義は實に當時の英國に對して、尤も適當の解釋を與へたもき、而かも之れを今日の事態には適用すべきにはあらず』と

歴史派は英國派の缺典に對して物興せるものなれば、人が經濟問題の主格たるを確認し、研究の範圍を擴大して、歴史上の事實を攻究し、以て今日の經濟社會が成立せる由來を察し、倫理政治との關係に就いても進んで討究する所ありたり、然れども全然自家の棲息せる社會の影響を脱し、若くは社會に關する各般の學科を綜合して、經濟的發達の將來の趨向を察する如きは尙ほ缺如たるものあり、思ふに今後斯學が發達する方面は、現社會の影響による先入的誤謬を擺脫し、社會の成立、性質、進化の趨向並びに個人との關係を考察して、人類が社會的生活に於いて、採るべき經濟上の方針を指示するに在るべし、獨逸派經濟學者の多數が穩和なる國家社會主義に傾ける如き、從來の頑固なる個人主義に對して、確かに一大進歩と認めらるべきも、而かも之れとて獨逸の如き國狀に於いて初めて可なるもの多く、若し世界の將來を考ふれば今少しく世界的性質を帶べる思想の、歡迎せらるゝ時機あるべし、現に東洋問題に對して列

國の標榜する所は、門戸開放と云ふに在りて、一種の自由主義に外ならず、又日本の如く太平洋交通の衝路に當る國に在りては、列國は互に寛大なる政策によりて、貿易の發達を來さんことを望まざればならず、若し獨逸派を以つて英國派の個人主義に對して起れる國家主義となさば、將に起らんとするものは、之に對する世界主義的のものなるべき乎

個人主義的經濟說と世界主義的經濟說とは國家の分立によりて被むる損失を避けんとする點に於いて相一致すべきも、又全く相異なる點あるべし、前者の場合には極端なる自由放任論は、社會進歩の原則として承認せられんも、後者に於いては極度まで自然淘汰を行はしむるは、苛酷に失するものとせられん、抑も總ての科學が世界の一般的現象を基礎として、立論せらるべきは勿論なるが、從來の經濟學が此點に於いて缺く處所ありしは、其名稱にポリチカルてふ形容詞を冠せられ又は國家經濟學等の名稱を

用ひられしにても其一斑を推知すべし、又近時國家經濟學の名稱に代うるに社會經濟學の文字を以てせるは斯學進歩の趨向を示すものと云ふべき乎

保護干渉と自由放任

總ての學術は皆社會狀態に反應して成立す、實地應用を主とする經濟學に於て殊に然り、英國經濟學派の立論は十八世紀より十九世紀中葉までの、英國の社會狀態の反射せるものにして、之れを丸呑にして他國に應用する時は、幾多の不都合を生じ來るべく、此學說が科學的思想の高度に發達せる獨逸に入りて、多大の變化を來せしは洵に故あるなり

自由放任主義は英國學派の最大特質なり、之れ十八世紀中頃より十九世紀初に至る西歐諸國殊に英國に於ける社會の必要條件に外ならざりし、當時經濟上に於ける諸種の

發明新組織續出し、革新進取の勢極めて旺盛なるものあり、而して行政の機關未だ完備せず、政府の民間經濟狀況に對する智識極めて粗漏にして、特に大局の觀測を缺く、之れを以て偶々經濟行爲に干渉を試むるや、或は偏頗に陥り、或は利害の考察明白ならず、或は煩雜に亘りて進取革新の機運に阻害を與へ、或は手續検査等の爲めに多大の損害を被らす、之れ勅典の勢旺盛にして敏活迅速を尊ぶ、經濟社會の堪ゆる處にあらざ、放任論の起れるは洵に當然なりし也

十九世紀前半末より自由放任の經濟說、尙ほ熾盛なるものあるに拘はらず、列國何れも干渉政策を採らざるものなく、工場法制定、航海獎勵、鐵道政策、關稅設定、通信機關完備等に力を盡し、貿易關係に於ては甚しき自由主義を採りし英國も、勞働制限特許制度等に對しては、著しき干渉主義を採り、之れ全く十九世紀に入りて行政機關完備し來り、通信統計調査十分に行はれ偏頗煩雜の弊も減少したると、産業組織も

漸く秩序立つに至りしが爲め也、之れを經濟政策以外に見るも自由平等の極端說漸く排除せられて政府萬能主義流行の兆を示せしは、實に此時代なりし也、之れを以て自由放任論の排除せられし原因を單に立論の誤謬にのみ歸するは、亦時代の勢力に動かされて、他の極端に奔るの誣を免れざるべし

現に支那朝鮮の如きに在りては、政府の經濟上に干渉するは決して其發達を來すものと云ひ難し、是れ等の國に在りて政府萬能主義を唱ふるものありとせば人以て狂者と評せん、之れ行政機關不完全にして官吏に私曲多く、通信統計等の不十分なるが故なり、凡そ政府は干渉を行ふ以前干渉すべき事柄の、真相を熟知せざる可からず、換言すれば政府は干渉する十分の理由を有せざる可からず、之れ無くして妄に干渉するは、政權の濫用と稱せらるゝも辯解の辭なかるべき也、此理論は如何なる開明國にも適用するべくして政府の知識不十分なる事柄に向ては可及的干渉を避くること必要なり

總て政府の保護干渉を行ふや、一定せる組織系統を有して官署と官署、政策と政策、法令と法令との間に矛盾撞着なきを要す、此弊は我國にも往々實見する所にして、之れが爲め産業の發達を妨げ、而も多額の經費と時間とを徒費す

組織系統を有する保護干渉と云はゞ、極めて簡單なる事柄と見ゆるも、之れを實際に現はすは頗る困難の事に屬す、彼の關稅による保護の如き原料を保護すれば製造業を妨げ、製造業を保護すれば原料の生産を遏むる等、頗る撞着を生じ易し能く此間の調和を保つは、一に行政立法の衝に當る人物の眼識如何によるものにして、豫め其理論を指示するが如きは到底不可能なり、若し當路者にして此調和を致す成算なくんば、唯自由放任の一途あるのみ、要するに自由放任は自然にして保護干渉は人爲を以て自然を助くるものなり、濫りに行ふ可からず

保護は可及的一般的に且つ間接なるを要す、直接の保護は官民結托して弊を成し易く、

個々の保護は矛盾遺漏を生じ易し、之を受くる側に在りても個々直接に保護せらるれば自然に官府に依頼し權門に媚ぶる風を生ず、彼の郵船會社其他の被保護會社に於て、親しく其例を見るを得ん、若し一般的且つ間接に保護せんか、一方には其好結果を享くると共に、他方獨立競争の利益を寸毫も損せられずして以て十分の發展を遂ぐべし、産業の進歩を計る第一の策は道路の修築、港灣の修築、鐵道の開通等に在らん

經濟學と社會主義

經濟學者と社會主義者とは相對抗する事猶ほ仇敵の如く、前者は後者と空論煽動を旨とすと云ひ、後者は前者を徒らに資本家に媚ふと稱す、元來社會主義は其根原を貧民に對する同情に發し、貧民生活の改善を計るは其主眼なれば、隨つて其主張の基礎を經濟學上に置くにあらずんば、到底實際の效果あるべきにあらず、之に於いてかマル

之を初めとして多数の社会主義者は何れも多少経済学の智識に依つて貧民問題を解決せんとせり、而かも其論法概ね現経済組織の缺點を指摘するを以て足れりとするもの如く、過去現在の経済的發達進歩に向ふて毫も感謝同情の念なく、経済學者に對しては初めより敵對の態度を以つて、筆を進めたるもの、如き觀を呈せり、此の如くして悪んぞ能く眞正の理義を闡明するを得んや、翻つて経済學者を見るに、英國派の内にもミルの如き熱心なる社会問題考究者あり、近時の獨逸學派に至りては、殊に労働問題の考究に勉めり、而かも、概ね淺薄なる分配論や労働制限論を提唱するのみにして、社会制度の根本に立入りて將來の趨向を指示し、革新の機運を促進する底の論法に至つては、全く缺如たるものあり、随つて社会主義者の本據を奪ふて之れを其旗下に包容する如きは、殆んど之れを夢想だも爲す能はず

經濟學者は思へらく社会進歩の爲めに、其分子たる個人が犠牲に供せらるゝは洵に已

むを得ず、一國の富力生産力増進せば、其恩惠に浴するものは之れを組織する國民にあらずや、一部の不適者を損して大體の進境を招くは、之れ進化の原理なりと、此の如きは進化論の感化を受けて、適者生存の理を其儘經濟學上に應用せる人々の、毫も説明の要なしと思惟せる所なり、社会主義者の觀察はかゝる概括的大體論と一致せず、近代産業の組織が著しく個人の幸福を毀損する事實あるを認めて、富力生産力の増進は、必ずしも一般の幸福とはならず、一國の富力如何に増進するも、少數の富豪跋扈跳梁して大多數は、日々の生活にも苦しむ狀あらば、譬は、糞土を包むに錦を以てするが如しと説けり、工場法を制定する場合の如き殊に兩者見解の相違を窺ふべし、一方の希望は如何にせば生産力を減損せざらんかと云ふに在り、他方の目的は如何にせば個人の幸福を高めんかと云ふに在り、之れに於いてか、不知不識一は労働者に黨し、他は資本家の味方となりて、此に感情の衝突を來して、遂に調和的精神を缺くに至る、

入替労働問題の如きは、幸に兩者の調和し得たる一異例と云ふべき也
 現在の經濟組織に不平家の憤激に値すべき幾多の缺點あるは、争ふ可からざる事實
 なるも、而かも最も非難せらるる諸點は、多くは制度其者の罪にあらずして偶々産業が
 漸次社會上に、重要な地位を占むるに至りしと共に、舊時他の方面に現はれたる弊
 害の、殊に經濟上にのみ著しく感ぜらるるに至りし也、例へば資本家労働者の關係の
 如き、古往には治者被治者との關係に於て存在し、治者壓制の度遙かに今日の資本
 家に超へたり、十八世紀末より十九世紀初へかけて、世界到る處貴族專制の風を打破
 するや、何人も封建の遺習全く已みて、各人平等の地位に立つべきを豫期したり、然
 るに實際は資本家なる一階級起りて、封建諸侯の變形たる形況を示せり、之に對して
 非難攻撃の起れること其理なきにあらざり、併し眞正の公平なるものは一朝一夕に實
 現するべきにあらず、世界の歴史は民衆が絶へず自由平等を得んが爲めに、憤闘し來

ぬるを示すも、一度も根本的解決のありしを示さず、資本家労働者の關係は或は打破
 せらるることを得らんも、其之に代るべきものゝ發生すべきとも亦疑ふ可らず、經濟上に
 現はれたる新貴族は舊方の代表者なり、抑も富力が天下を支配せんとする傾向を生ず
 るに至りしは、其淵源專ら甚だ遠かりき、十六七世紀の頃各國何れも國內の秩序統一
 を完成せし時、武勇の勢力自然に衰へて、富力は漸く之に代らんとせり、當時武力の
 把持者たるも、舊貴族は、偶々土地を以て富を擁せしを以つて其形勢明白に現はれざりし
 も、都市海港等に在りては富力既に隱然重きを爲しぬ、十九世紀に及んで富の増殖急
 に其速度を大にし、此一世紀間の蓄積は優に過去十數世紀間に比するに足ると稱せら
 るる、土地以外に財力増加するに伴ふて、舊貴族の勢力漸く墜ち、新貴族たる富豪
 の勢力俄かに増加しぬ、彼等は種々の關係よりして、政治界の諸勢力を自家制令の下
 に隷屬せんとし、略ぼ其目的を達したり、而して現に資本家を攻撃しつゝある社會主義

者の前身たる、民主々義者は其運動に對して多大の助力を與へぬ、然るに封建貴族亡びて富豪之れが變態と見做さるゝに至るや、其本據たる資本は諸の罪惡の根原と見做され、富豪の之を蓄積せしは不正の手段に依れるものなりと説けるものあるに及んで、曩きに封建貴族を斃すに協力せし民衆の内に、内輪破れを生ずるに至りし也

此時經濟學者は將に成立せんとしつゝある秩序の味方として、多少資本家の辯護に努めたり、曰く富者の資本を蓄積するの目前の快樂を捨てたると、才能勤勉の結果とによれり、而して資本の増加は勞力の需要を多大にして、社會の繁榮を來す原因を爲すと、此議論は頗る穩當にして非難すべき點尠し、蓋し富の占有の爲めに幾多の罪惡起らざるにあらず、資本の増加と個人の福利と相伴はざることをなきにあらず、而かも之れ多くは必然的の結果にあらずして、例へば政治其者は厭惡すべきものならぬも、之れに伴ふて諸種の弊害起るが如し、富豪の内に專横冷酷の徒現はれたりとて、直ちに

罪を經濟組織に歸するが如きは輕躁も亦甚し、要するに社會の最大勢力を把持する者が、自己の慾望を過度に満足せしめんとする傾向あるは古今の通弊にして、徳義が社會の最大勢力となるまでは、絶へず強者專横の反覆さるゝを見るべく、之れに對して十分矯正の力を盡すは、固より當然の事に屬するも、直ちに制度を破壊せんとするは事を好むも亦甚し、此間に立ちて經濟學者が秩序の成立に協賛したる功績は、之れを認識せざる能はず、唯時勢の常に變化するを以て、過去に於いて功績ありしものも、將來は發達を阻害する原因となることなきにあらず

枝葉の問題は別として大體經濟學者と社會主義者との不調和は、如何にせば生産力の増加を妨げずして、財の分配を公平ならしむべきかたふ問題を解決するを得ば、略ぼ之れを除去し得られん、而かも之れ現在に於いては極めて困難なる問題なり、元來相続制度の存在は財の公平なる分配を妨ぐる最大原因なれば、之れを廢止せば各人比較

的公平なる基礎によつて相競ふを得べく、之れが爲めに社會主義者は相續制の絶體的廢止を主張するが、經濟學者中にも苛重なる相續税を賦課するを以つて、至當なる政策なりと思惟するものあり、かゝる比較的類似の議論が多く兩者の間に現はるゝに至らば、兩者の軋轢も徐々に減少せしむるを得べき乎

日本の經濟學社會主義

經濟學研究者にとりては我國ほど都合よき國は稀なるべし、近世産業の中心たる歐米を總て客觀的に觀察するを得て而かも中世的國家たる支那朝鮮を研究するにも特殊の便利あり、加之我國自身は僅々四十年間に中世的狀態より、一躍最も進歩せる邦國の班に入り、他國の二三世紀に亘る歴史は我國に在りては、僅々半世紀以内に短縮せられ、此間に一大内亂に二大戦役の起れるあり、不換紙幣の弊害も金銀兩制度の利害も亦皆

皆之れを實驗し、飢饉恐慌の災害にも遭遇し、財政の上にも非常の變化を見、經濟上の難問を解くべき材料は、殆んど皆具備せる趣きあり

社會の實狀此の如く便利多きに拘はらず經濟學の發達に至りては頗る遲緩にして現今も尙ほ歐米に比して非常の懸隔あり、英國派と目せられる人としては田口博士、天野博士の如き學理の研究と事實の觀察に於いて、一家を成せるもの出てざるにあらざるも、他は概ね歐米の書を濫讀して管に自家の見解を立つる能はざるのみならず、實際の事に對して、智識皆無の人も亦尠からず、獨逸派と標榜せる人に於いて殊に然り若し夫れ専門以外の士に就いて、經濟的智識の有無を驗するに及んでは、唯言語同斷と云ふ外又言ふべき辭なきを覺ゆ、畢竟之れ近世の産業的時代に入ること日尙ほ淺くして殖財を輕んじたる、封建時代の遺習未だ去らざるに依るものなるべく近時産業の漸次重要視さるゝと相並行して經濟的智識も亦發達し來るべし

社會主義の發生地としては日本は極めて不適當なる國の一なるべし、社會主義者の唱ふる弊害の多くは、殆んど我國には起り居らずして資本家と勞働者の反目は未だ甚しからざるなり、之れを以て眞實社會主義に歸依して、其實行を期するものは極めて僅小なり、只少數の野心家空想家の之を唱道して、煽動を事とするを見るのみ、余は現今此派の牛耳を採れる二三子と多少の交際あるを以つて、詳細に之れ等の人々の言行に就いて、批評するを好まずと雖、只是等の人々が日本の現社會に對して、幾何の智識と同情とを有するかてふ點に於いて、大に疑問を抱きつゝ、あるを表白するに憚らず

2/3/41

明治四十年十二月五日印刷
 明治四十年十二月十五日發行

定價金四拾參錢

郵税金六錢

著者兼發行所

安田與四郎

東京市牛込區市ヶ谷田町三丁目六番地

印刷者

馬淵貞吉

東京市日本橋區久松町三十五番地

印刷所

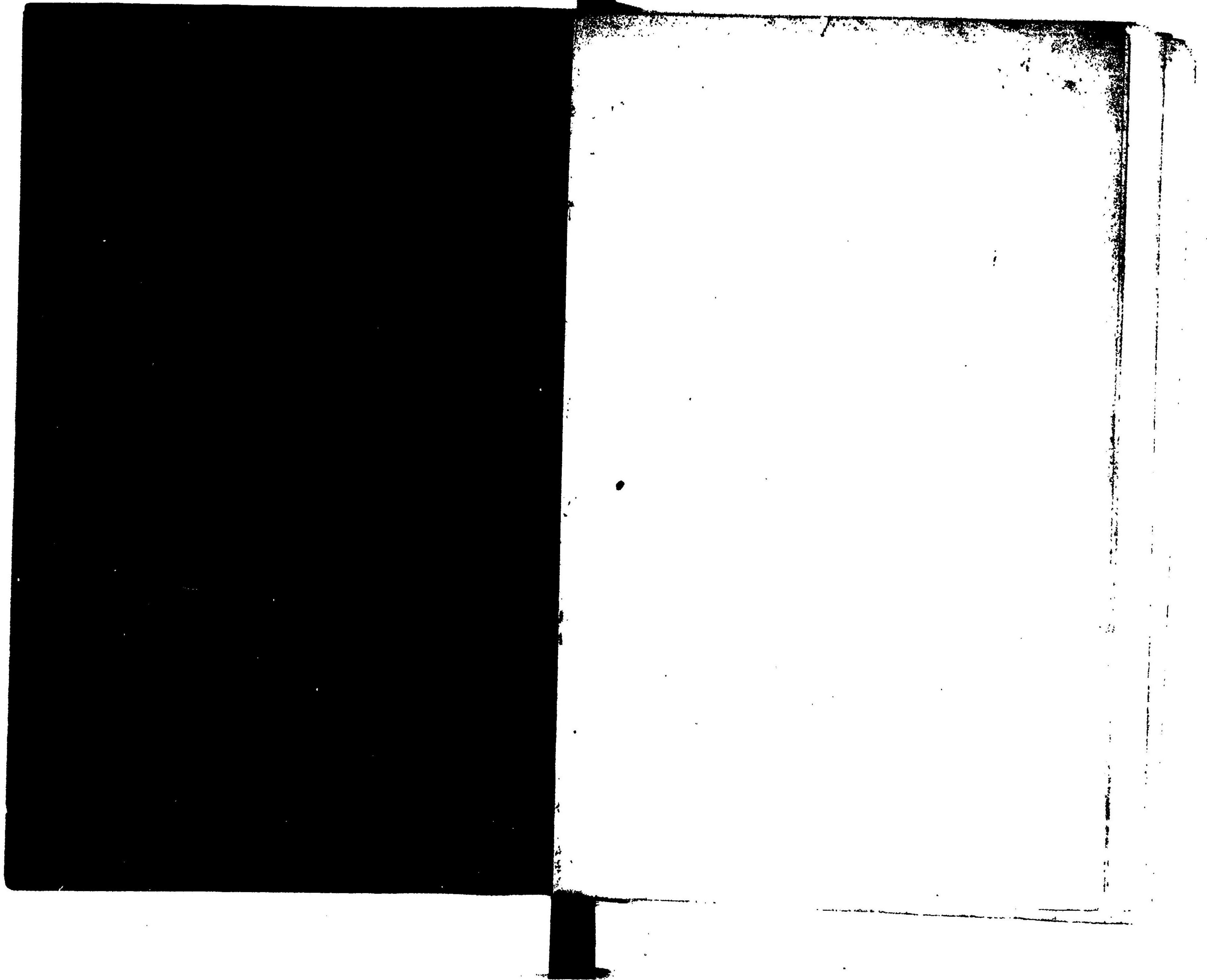
金城社

東京市日本橋區久松町三十五番地

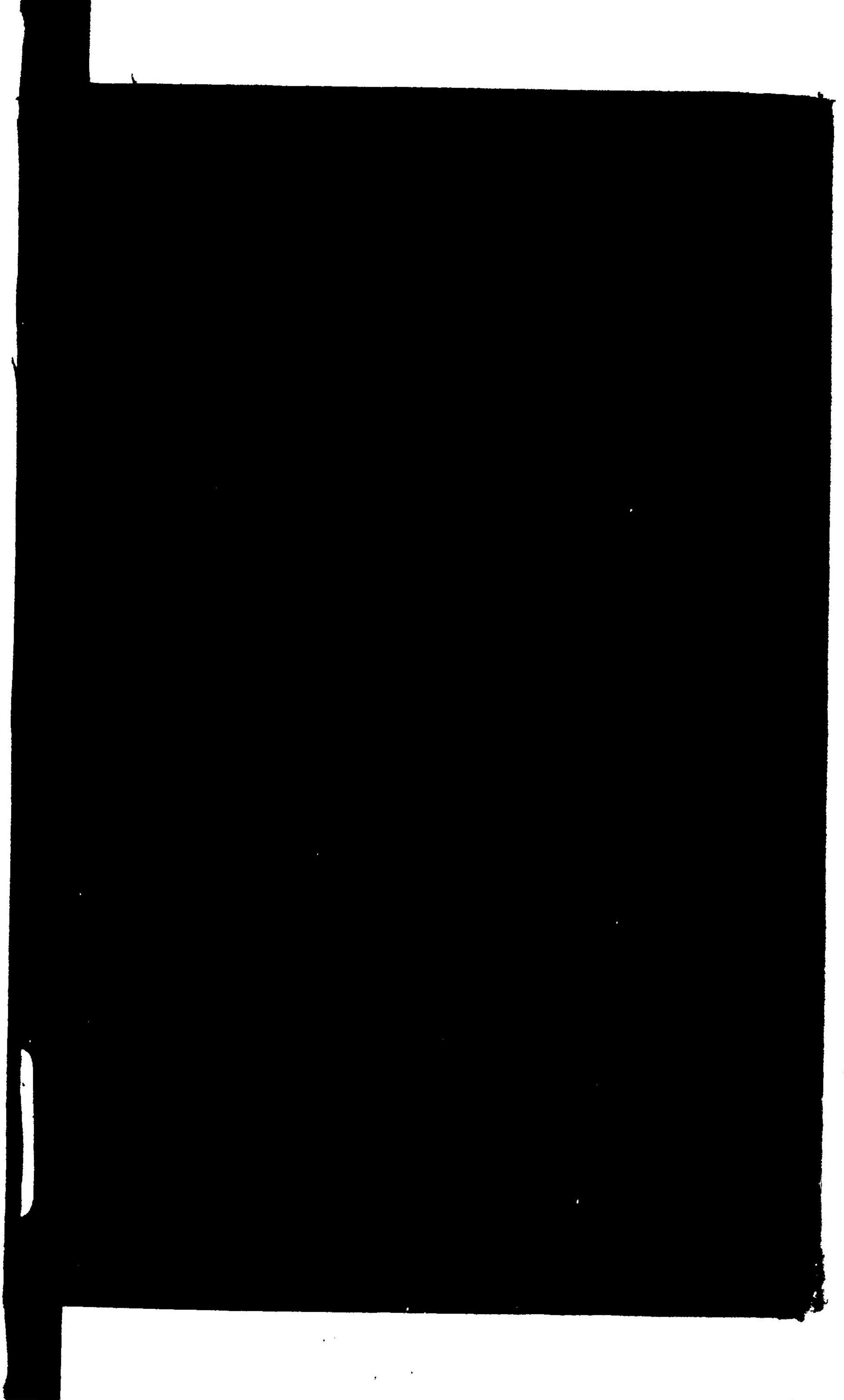
東京市京橋區尾張町二丁目二十六番地

發賣所

東海堂



97
524



040308-000-5

97-524

資本論

安田 与四郎/著

M40.12

BDD-0404



